

音楽

伊藤祐二 (作曲家)

ユージ 芹に

気をつける

紅葉坂プロジェクト Vol.3 「マキシマム合唱団」

7月20日 神奈川県立音楽堂

新しい音楽を自主企画で特集すること
に長い歴史と実績を持つ神奈川県立音楽
堂には心から敬意を表したい。その開館
70周年記念シリーズ「新しい視点」紅葉
坂プロジェクト Vol.3。

「マキシマム」は、作曲家、楽器製作者の磯部英彬が主宰、作曲家星谷丈生と共に、活動実績を重ねる。その特徴は、興味深く、時に奇天烈(?)な自作楽器、例えば ISOBE Rail (イソベレール)、ISOBE Shot (イソベショットスピーカー) 等と、PC プログラム、例えば ISOBE Tune (イソベチューン) 等の使用。磯部、星谷両氏の作品を演奏。演奏は、両氏に、亀井庸州、多井智紀、近藤圭、菊池秀夫、今井貴子、高瀬真吾、迫田圭の盤石な演奏家陣が加わる。「合唱団」となっているのは、皆で歌う故。星谷作品は、微分音程^(注)で書かれており、各自が発声した声を「イソベチューン」で正確に自動補正、正確な微分音ハーモニーを得る仕組み。緻密な作曲に、聴き慣れない自作楽器、優れた演奏家があり、両作品ともに、一度聴いただけで聴ききれない高密度な音楽だった。また聴きたいと思った。そしてさらに、もっと自由で風変わりな、新しい音楽を聴きたいと思った。もちろんそれは、本当に難しい事なのだが。

自作楽器と言え、もう一つ、いい音を聴いた。アンサンブル・ノマド第82回定期演奏会 10月5日 東京オペラシティリサイタルホール での、小栗舞花の「オグリフォン」。スプリングドラムをアレンジしたような楽器(鈴木昭男のアナラポスを思い出した)。曲、パフォーマンス的な演奏共に、おおらかな仕掛け。後半、奏者が客席の周囲からステージに移動する際、のとても低い、音と言うよりも空間が鳴るような響きはとても魅力的だった。

山本裕之作曲個展「境界概念」

11月6日 杉並公会堂ホール

「四半世紀ぶりの個展」と本人が記すように、山本裕之は長年、着実に実績を積み重ねてきた作曲家。今回は、四分音^(注)を扱った作品の特集だったので耳をダンボにして、とても興味深く聴き、色々考

えさせられた。山本裕之は、自分の耳で検証しながら注意深くその用法を研究、蓄積している。これは本当に大切な事だと思う。

トロンボーンシアターM「禁断のカテゴリ」「シアターピース」への憧れ

11月11日杉並公会堂ホール

村田厚生は、長年、自主企画のリサイタルを継続しており、私はそういう演奏家をリスペクトする。今回は、ステージ上での様々な演技、パフォーマンスを含む作品の特集。ステージに立つ、だけで大きな存在感。豊かな表現、それと感じさせない高い技術。多様な作品が並んだが、最早、村田厚生という存在を十全に生かし切るには、相応の作品が必要だとも感じさせられた。

(注)「微分音、四分音」／この字数で説明は不可能だが必要と思われるのでざっくりと。近代西欧の音楽では、1オクターブを12等分し、隣り合う音の周波数比を同じにした音律^{12平均律}を前提としている。その際の最小の音程は「半音」(例:ドとド#)だが、それをさらに分割するのが微分音(程)。その中で、半音を $\frac{1}{2}$ に分割するのが四分音(程)。その扱いには定番が無いので、作曲家が開拓することになる。なお、微分音程は、各種民族音楽の中には、普通に多く見受けられ、それを「微分音程だ」と言うのは近代西欧視線、民族音楽に失礼?